

辻村深月の深化 文学における「虚」と「実」

図書館係 阿部健治

高校生の時、現代文の先生が、文学者の姿勢として「芸術至上主義」（家族や生活を犠牲にするくらいでないですぐれた芸術は生み出せない）と「生活派」（人が現に生きている、その日常と対峙することですぐれた芸術は生まれるもの）の対立というものがあるが、どちらが正しいと思うか、と私たちに問いかけた。筆者は迷わず前者に手を挙げた。見回すと、他には2、3人が遠慮深そうに手を挙げていた。では「生活派」支持が多いかというところでもなかった気がする（実はよく覚えていないのだ）。とにかく、先生はこれを受けて、私の方を見ながら（自意識過剰かも…）説明を始めたのだが、どうも先生は、どちらかと言えば「生活派」の方に与（くみ）しているように思えた。納得がいかないという記憶だけが強く残っている（記憶って本当に自分勝手だ）。

筆者はこういう傾きを持っていたから、受験勉強からも現実逃避して将棋に夢中になり、やがては対局相手も必要ない詰将棋に耽溺した（今風に言うなら「ゲーム狂」のようなものだ）。詰将棋は知的なパズル世界（当時早稲田の学生だった橋本孝治さんが作った、1525 手詰の『マイクロコスモス』という作品などはノーベル賞級の達成だと今でも思っている）で、論理的建造物とも言える偉大な芸術作品に、ひたすら酔い痴れていたのである。

それでも結局は現実世界に戻ってこないわけにはいかないから、不本意ながら教員を目指して大学入学したのだが、抜け殻のようだった筆者が特に興味を持ったのは推理小説だった。そこで描かれる「トリック」の精巧さに大いに魅せられ、最盛期には1年で300冊ほどの推理小説を読み、読書ノートを作って1作ごとに感想を書き、「トリック分類表」なども作った記憶がある（若さ故のひたむきさが何ともいとおしい）。

ところが、ある時期から急に推理小説がつまらなくなった。それは、一口で言えば、「ソラゴト」を追いかけ回しても空しいのではないかと感じるようになったということである。現実には、殺人事件に出くわすことはまずないし、ましてや、トリックを駆使した「計画的殺人」などあるはずがない。もちろんそんなことは百も承知で楽しんでいただけだが、とにかく関心がより切実な「现实生活」の方に移ってしまい、もう「ソラゴト」は楽しめなくなってしまったのである。

なぜこんなに長い前振りをしたかというところ、辻村深月のどの作品にも濃厚に漂う推理小説的手法について話したいからだ。幼い頃から読書家だった辻村は小学6年生の時、推理小説作家の綾辻行人にファンレターを書き、彼に励まされて作家を志したという（辻村というペンネームは綾辻にあやかっただけのもの）。従って「推理小説的手法」は既に彼女の作家としての骨肉を形成する抜きがたい要素となっている。これが作品の出来映えにどのような影響を及ぼすのか、このことに着目

しながら、同じテーマを扱った彼女の二つの作品、『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ』（2009・第142回直木賞候補作）と最近作『傲慢と善良』（2019）を比べて感想を述べてみたいと思ったのである。

この2作のテーマは「**地方都市で生まれ育ち、母の言うことをよくきいて慎ましくやかに生きてきた娘の自立**」というものだ。辻村は山梨県に生まれ育った。読書に耽溺する娘を、母親は愛しもし、はらはら心配もしただろう。愛するが故に娘のリスクを極力除いてやりたいと望む母と、新しい世界に飛び立ちたいと願う娘。「母娘の相克」は人間の永遠のテーマの一つであり、足女生諸君にとっては目の前に迫った課題でもある。さて、辻村はそれをどう描いたのか。まず、2作のあらすじを記してみる。

『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ』
幼なじみの望月チエミが母親を殺して失踪。仲良しで評判だったあの親子に何があったのか。母親を殺すなら自分の方だったはずなのに。母や故郷を捨て、幸せな結婚生活を送っていた神宮司みずほは、あることに思い至り、逃げ続けるチエミの行方を追う。

『傲慢と善良』
結婚を半年後に控えた婚約者の坂庭真実（まみ）が失踪。彼女はストーカーに追われていると訴えていた。しかし、いくら調べてもストーカーの姿は見えてこない。しかし、それを調べ続けるうちに西澤架（かける）は、いやおうなく彼女の「過去」と向き合うことになる。見えているようで見えていなかった彼女の真の姿。それはどのようなものだったのか。

娘の失踪が共通している。それを追うのは、前者では幼なじみの女性、後者は婚約者だ。前者は「母娘の相克」という課題を共有する存在だということに大きな意味があり、両者（めぐみとチエミ）はそれぞれを映し出す鏡のような役割を果たし合っているのが面白い。めぐみの結婚前後から疎遠になっていたチエミを、生活の全てをかけてめぐみが捜すという設定は不自然に思えるが、実は読者を十分に納得させる理由があるのだとだんだんわかってくる。また、チエミはなぜ母親を殺したのか。本当に彼女が殺したのか。彼女はなぜ逃げ続けるのか。これらの疑問に対し、作者はラストで見事な解答を用意している。ネタバレになるので書けないが、命名の謎（「ゼロハチゼロナナって何？」）も合わせて、ミステリーファンの言う「伏線とその回収」は完璧に機能していると言ってよい。それが「娘の自立」というテーマを引き立たせ、味わいを深いものにもしている。しかし…。「しかし」なのだ。辻村の説明は見事で、こういうことが起こったと言われれば、確かにそうかもしれないと納得はできるのだが、それでも違和感が残るのだ。殺害場面は、あり得るとは言え、ドラマチックに過ぎると感じるし、チエミの恋愛についても筆者にはかすかな違和感がある。それに比べると、『傲慢と善良』の方は全てにおいて自然で、これは現実起こりえる（誰だって婚約者が失踪したら必死に捜すだろう）と思える。そして、真実の自立の過程も見事に書かれていて、そこに辻村作品の共通キャラ、「地域活性コーディネーター」の谷川ヨシノ（高校生の輝かしい青春を描いた名作『島はぼくらと』などに登場）が絡んでいくあたりにも、「**自立**」を強調する作者の主張を大いに感じた。ミステリー要素を骨組みでは使いながら、全体的には抑制し、テーマをより骨太に描いた『傲慢と善良』に、辻村の作家としての確かな年輪を感じたのである。